

小学5年生の漢字書字スキルに及ぼす「3C学習法」の効果

Effect of "Cover, Copy and Compare" for 5th grade elementary students on Kanji writing

○鈴木ひみこ¹・野田航²・米山直樹³・松見淳子³

(関西学院大学大学院文学研究科¹・日本学術振興会²・関西学院大学文学部³)

Himiko SUZUKI, Wataru NODA, Naoki YONEYAMA and Junko TANAKA-MATSUMI

(Graduate School of Humanities, Kwansei Gakuin University¹, Japan Society for the Promotion of Science², School of Humanities, Kwansei Gakuin University³)

keywords: Cover, Copy, and Compare, Writing, Kanji

問題と目的

3C学習法(Cover, Copy, and Compare)は、学業スキルの向上に対して効果を上げている技法である(e.g. Skinner, et al., 1989)。欧米では、計算スキルや単語の書字スキルの向上に対する効果が検討されており、いずれも一定の効果を上げている。

単語書字を例に挙げると、3C学習法では、1. 見本の単語を見る、2. 見本の単語を隠す、3. 見本と同じ単語を書く、4. 再び見本の単語を見る、5. 見本の単語と自分が書いた単語を比べ、正答かどうか確認する、という5つのステップに沿って学習を進める(Erion et al., 2009)。特に書字反応後、正答であるか否かの即時のセルフフィードバックを得られる点が、効果的に作用するといわれている(Nies & Belfiore, 2006)。また、自分自身で学習を進められるため、特別な機械や人員がいらない点も、利点として挙げられている。本研究では児童の漢字書字スキルを対象として、3C学習法の効果を検討した。

方法

研究期間・場所および状況：2010年2月～3月にかけて、放課後5年生の教室内で、週2回実施した。1セッションは約15分であり、合計7セッション中4セッションを第1著者が、3セッションを第2著者が実施した。

対象児：公立B小学校の通常学級に在籍し、漢字書字が特に苦手であるとして担任から名前の挙がった5年生の児童計5名であった(男児4名、女児1名、P1～P5)。

実験デザイン：刺激セット間多層ベースラインデザインを用いた。また介入終了後のポストテスト、1ヶ月半後のフォローアップによって介入効果の維持を検討した。刺激セット：担任との相談の結果、小学3年生で学習する漢字を対象とした。事前に漢字書字の予備評価を行い、未修得の漢字刺激を児童ごとに15刺激選定した。15刺激は、各セット間の漢字の画数が等しくなるように5刺激ずつ3セット(セットA, B, C)に配分された。

手続き：1)ベースライン 各セットの漢字5刺激を書かせるチェックテストを、介入前に実施した。なお、第1回目のチェックテストは介入前であったため、ベースラインデータに含めた。

2)介入 ①チェックテスト 各セットの漢字5刺激を書

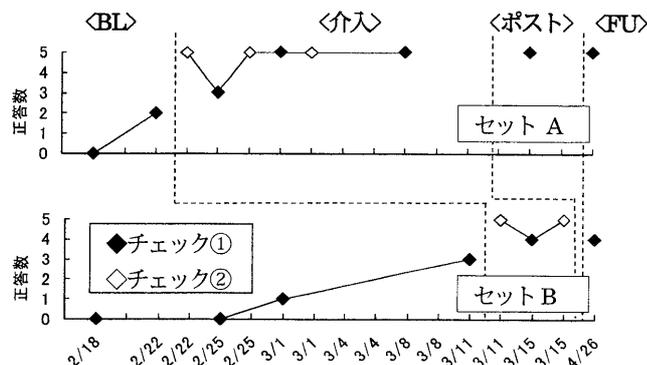


Fig. 1. 正答数の変化(P1). フォローアップ(FU)は1ヶ月半後。

かせるチェックテストとして、各セッションの介入前(チェック①)と介入後(チェック②)に毎回実施した。チェック①で5問全ての漢字が書けた場合に、次の漢字セットに移行することとした。またチェック①では、正誤のフィードバックは行わなかった。チェック②は、3C学習法での練習の後に実施した。チェック②では、終了後に正誤のフィードバックをし、誤答に関しては1回ずつ書き直しを求めた。また、その日のそれぞれのチェックテストでの正答数をグラフでフィードバックした。

②3C学習法 チェック①終了後、3C学習法に基づくワークシートを用意し、漢字5刺激の書字練習を実施した。具体的には、1. 見本の漢字をなぞる、2. 見本の漢字を隠す、3. 隣の空欄に当該の漢字を書く、4. 再び見本の漢字を見る、5. 書いた漢字と見本を比べ、合っているか確認する、という手順であり、これを1刺激ごとに5刺激全てで行った。

3)ポストテスト：当該のセットがチェック①で全問正答となった場合、次のセットに移行したが、介入を終了したセットに関して1週間ごとにポストテストを実施した。手続きは各セットのプレテストと同様であった。

4)フォローアップテスト：最終セッション終了後、1ヶ月半が経過した時点で、フォローアップテスト(FU)を実施した。手続きはプレテストと同様であった。

結果と考察

結果をの一部(P1,P2の児童)をFig. 1～2に示した。3C学習法を用いた介入を行った結果、学習の伸びに差はあるものの、5名全ての児童で正しく書けた漢字の数が増加した。また、個人差はあるもののフォローアップにおいても漢字書字が維持された。以上より、3C学習法は漢字書字の獲得に効果的であることが示された。また、担任教員に介入の受容度に関する調査を行ったところ、受け入れやすい介入方法であったとの評価が得られた。

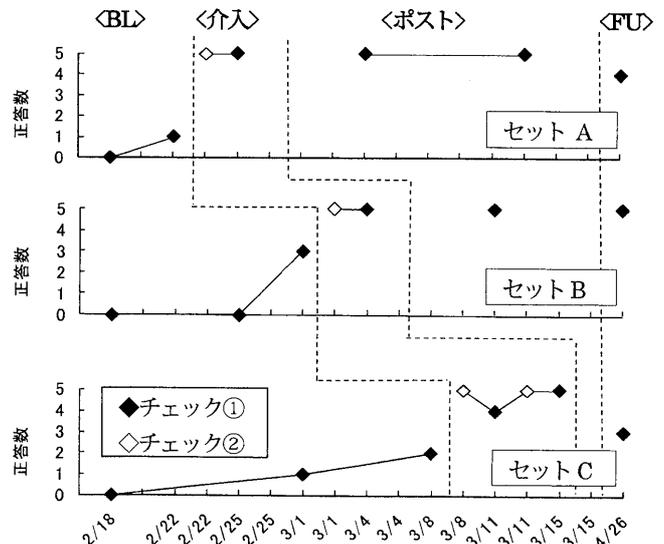


Fig. 2. 正答数の変化(P2). フォローアップ(FU)は1ヶ月半後。